1525年バーゼル版プリニウス『博物誌』について

雪　嶋　宏　一

１．はじめに

早稲田大学図書館が2016年度に収蔵した洋書貴重書の一つに1525年バーゼル刊行のプリニウス『博物誌』がある（図１）。本書はプリニウス『博物誌』としては最初にページ付けがなされた版であり、現在筆者が研究しているヨーロッパにおける近代的書物形式の成立と発展過程というテーマの中でページ付けの発展の解明にとって重要な資料とみなされるため、本書の概要とその書誌学的な特徴について述べてみたい。

２．館蔵の1525年バーゼル版プリニウス『博物誌』の書誌記述

Plinius Secundus, Gaius. *Historia mundi*. Basel: Johann Froben, 1525. Folio. [F462 27]

1^{r} (A1), title: IOANNES FROBENIVS LECTORI S.D. | EN DAMVS | C. PLINII SECVNDI DI|VINVM OPVS CVI TITVLVS, HISTORIA MVNDI, | multo quàm antehac unquam prodijt emaculatius: idq<ue> primum ex annota|tionibus eruditorum hominum, praesertim Hermolai Barbari: deinde | ex collatione exemplariorum, quae hactenus opera doctorum no-|bis quàm fieri potuit emendatissime sunt excusa: postremo ex | fide uetustissimorum codicum, ex quibus non pauca restiui|mus, quae alioqui

nemo, quamlibet eruditus, uel depre|hendot, uel deprehendere poterat. Absit inuidia di|cto. Vicimus superiores omneis. Si quis hanc pal|mam nobis eripuerit, non illi quide<m> inuide|bimus, sed studijs publicis gratulabi-|mur. Bene uale lector, & fruere | Ἀγαθῇ τύχῃ. | Additus est index, in quo nihil desideres. | [*device*] | Basileae apud Io. Frobenium, Mense | Martio. An. NM. D. XXV.

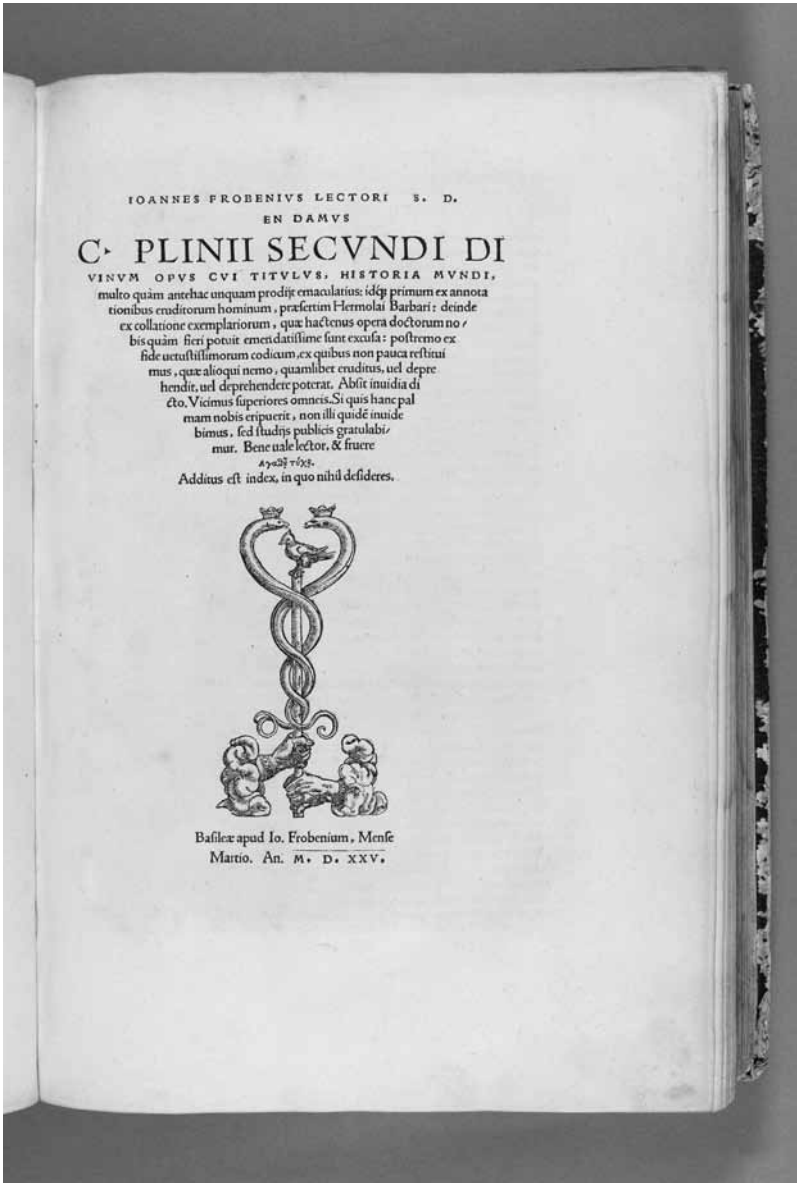
Part title, ^{2}a1^{r}: INDEX IN VNIVER|SVM NATVRALIS HISTORIAE | C. PLINII OPVS, SVMMA DI=|LIGENTIA COLLECTVS. | [*device*] |

The first explicit and colophon, p. 671 (2K6^{r}): C. PLINII NATVRALIS HISTORIAE, FINIS. | APVD INCLYTAM BASILEAM EX OFFICINA | IO. FROBENII MENSE MARTIO | AN. M. D. XXV.

The second explicit and colophon, ^{3}C5^{r}: Finis indicis in naturalis historiam C. Plinij | APVD INCLYTAM BASILEAM EX OFFICINA | Ioannis Frobenij mense Martio. Anno M.D.XXV.

Folio, A-C, a-z ^{2}A-^{2}C D-Z 2A-2K^{6}, ^{2}a-^{2}b^{6} ^{2}c^{8} ^{2}d-^{2}g^{6} ^{2}h^{10} ^{3}A-^{3}C^{6} [$3 signed (+^{2}c4, ^{2}h5); misprinting 2G4 as 'G4', Kk3 as 'KK3']; 426 leaves, ff. [1-18], pp. 1-671, [1] (misnumbering 179 as '189'), ff. [1-72].

Contents: A1^{r}, title; A1^{v}, blank; A2^{r}, Desiderius Erasmus's letter to Stanislaus Thurzo, bishop of Olmütz (REVERENDISSIMO PRE|SVLI, ET ILLVSTRISS. PRINCIPI STANISLAO TVR|zo Olmutzensi episcopo D. ERASMVS ROTEROD. S. P.|) on 8 February 1525 (M. D. XXV. sexto Id. Februar.); A3^{r}, A letter of C. Plinius Caecilius to Baebius Macer (C. PLINIVS CAECILIVS MARCO SVO S.|); A3^{v}, A letter of C. Plinius to Gaius Cornelius Tacitus (C. PLINIVS TACITO SVO S.|); A4^{r}, text of Book I; a1^{r} (p. 1), text of Book II; 2K6^{r}, Colophon; 2K6^{v}, device; ^{2}a1^{r}, part title; ^{2}a1^{v}, AD LECTOREM.; ^{2}a2^{r}, index (INDEX IN VNIVERSVM | NATVRALIS HISTORIAE | C. PLINII OPVS ACCVRATE AEDITVS. | in quo Primus numerus librum notat, Secundus caput, Tertius lineam assigna|ta<m>



IOANNES FROBENIVS LECTORI S. D.

EN DAMVS

C. PLINII SECVNDI DI
VINVM OPVS CVI TITVLVS, HISTORIA MVNDI,
multo quàm antehac unquam prodijt emaculatius: idq; primum ex annota
tionibus eruditorum hominum, præsertim Hermolai Barbari: deinde
ex collatione exemplariorum, quæ hactenus opera doctorum no/
bis quàm fieri potuit emendatissime sunt excusa: postremo ex
fide uetustissimorum codicum, ex quibus non pauca restitui
mus, quæ alioqui nemo, quamlibet eruditus, uel depre
hendit, uel deprehendere poterat. Absit inuidia di
cto. Vicimus superiores omneis. Si quis hanc pal
mam nobis eripuerit, non illi quidē inuide
bimus, sed studijs publicis gratulabi/
mur. Bene uale lector, & fruere
ἀγαθῇ τύχῃ.
Additus est index, in quo nihil desideres.

Basileæ apud Io. Frobenium, Mense
Martio. An. M. D. XXV.

図１　プリニウス『博物誌』バーゼル：ヨハン・フローベン、1525年、標題紙（A1^{r}）
早稲田大学図書館所蔵［F462-27］

margini, Quartus faciem alteram foliorum in prolixioribus capitibus.|); ^{3}C5^{r}, second colophon; ^{3}C5^{v}, INDEX TERNIONVM TOTIVS OPERIS. | seven cols.; ^{3}C6^{r}, blank; ^{3}C6^{v}, device.

a2^{r}, 48 lines with marginalia and headline + direction line, 263 (273) x 160 (187) mm. Line numbers printed every ten lines in inner margin of pp. 1-671. Index in 3 or 4 cols. 110R, text; 87 It, index.

Ref.: VD 16 P3533.

Copy: Waseda University Library (F462-27), 370 x 245 mm. The index part is bound at the head of the volume. A few marginalia in Latin. MS in 2K6^{v}: … Anno MDXXV | VIII Maij.

館蔵本では、索引が先頭に製本され、2K6^{v} の下方に所蔵者による「1525年５月８日」の日付が手書きされている（図２）。本書の刊行が1525年３月であることから、手書きした人物は本書の最初の所蔵者であるとみなすことができる。しかし、この所蔵者については現時点では明らかではない。早稲田大学図書館の OPAC の目録は現状の状態の記述であるが、書誌学記述ではアイデアル・コピーに基づいて記述する必要があるため、上記の記述はアイデアル・コピーに基づいたものである。

３．著者プリニウスについて

本書の著者プリニウス（Plinius Secumdus, Gaius, 後23/4-79）はノウム・コムム（Novum Comum、北イタリアのコモ）の裕福な市民階級出身の著名な著述家である。彼の甥も著述家でプリニウス（Plinius Caecilius Secundus, Gaius, 61-112）と称することから、両者を区別するために本書の著者は大プリニウス（Plinius Major; Pliny, the Elder）、彼の甥は小プリニウス（Plinius Minor; Pliny, the Younger）と呼ばれている。大プリニウスは18歳で騎士（eques）を選択して、司令官の道を歩み、ローマに出て市民としての経験を積んだ。そして、47年から57年にゲルマニアの軍務に就き、騎兵大隊の

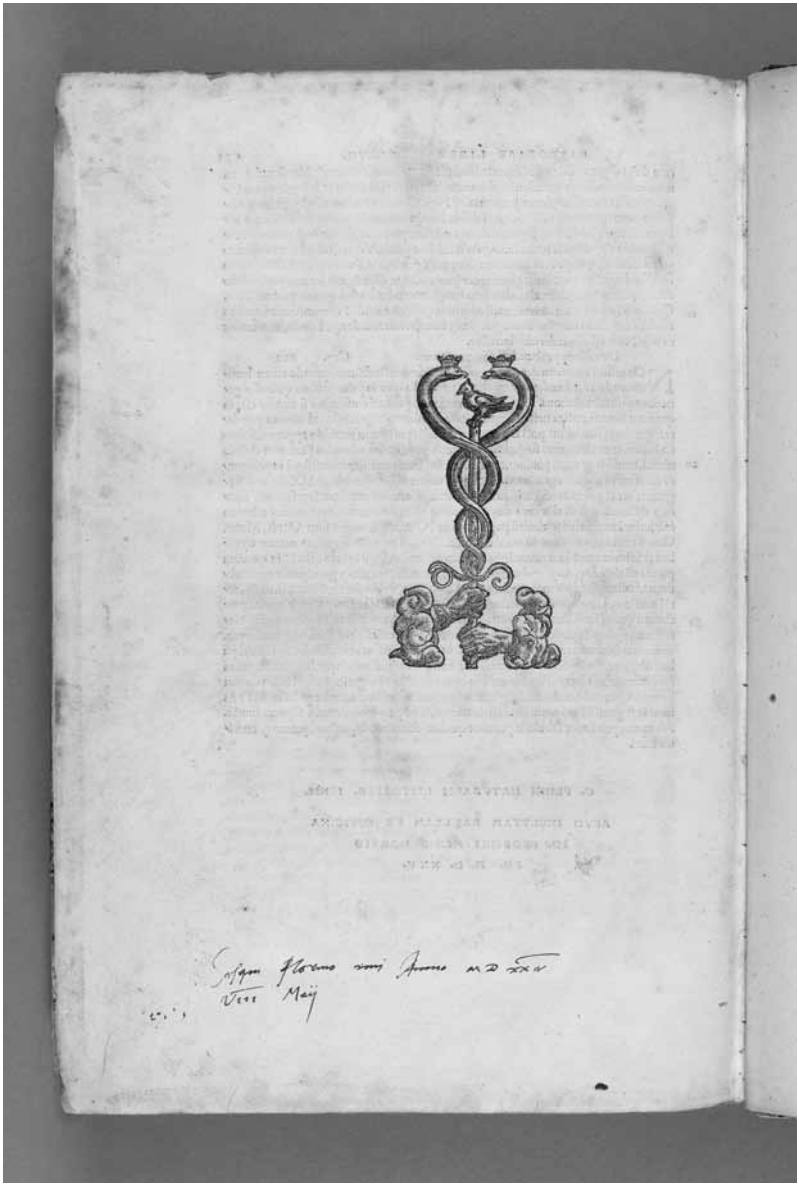


図２　早稲田大学図書館所蔵1525年バーゼル版プリニウス『博物誌』、
2K6ᵛ 下部に見られる旧蔵者の書き込み

司令官となりゲルマニア各地に駐屯した。ゲルマニアからローマにもどると、後に皇帝となるティトゥス（Titus Flavius Vespasianus, 在位79-81）に仕え、62/3年には地方代官（praefectus）に昇進した。さらに、諸説あるが彼は72-74年にヒスパニア（Hispania Tarraconensis）で財務官（procurator）の任に就いていたようである[(1)]。小プリニウスは執政官マケル（Macer, Baebius）宛ての書簡（Plinius Minor, III, v）の冒頭で大プリニウスの著作一覧とその概要を掲載している。『騎兵の槍術』１巻（De iaculatione equestri unus)、『ポンポニウス・セクンドゥスの生涯』２巻（De uita Pomponi Secundo duo)、『ゲルマニア戦記』20巻（Bellorum Germaniae uiginti)、『弁論術学習案内』３巻（Studiosi tre)、『文法上の曖昧な表現』８巻（Dubii sermonis octo)、『アウフィディウス・バッスス以後の歴史』31巻（A fine Aufidi Bassi triginta unus)、『博物誌』37巻（Naturae historiarum triginta septem）の７書である。そして、彼は大プリニウスが生涯にわたって一時も休まずに寸暇を惜しんで勉強し、風呂場においてすら口述筆記をさせて、常に学問に邁進していた姿を記している[(2)]。また、同じ書簡の中で、小プリニウスは大プリニウスがパピルスの表裏に小さな文字でびっしりと書き込んだ160巻もの抜粋帳を残したと述べている[(3)]。

さらに、小プリニウスは歴史家タキトゥス（Tacitus Cornelius, Gaius, 55?-120）の求めに応じて大プリニウスの最期について書簡に記している（Plinius Minor, VI, xvi)。大プリニウスは79年８月24日のウェスウィウス火山の噴火の際に自ら船を出して友人救出に向かうが、ポンペイ南西の海岸スタビアエに上陸して食事後寝入ってしまい他界したという[(4)]。

大プリニウスが生涯にわたって絶え間なく続けた学問研究の成果は上記の著作に結実したが、現存する著作は『博物誌』のみで、その他は残念ながら散逸した。

４．『博物誌』の印刷出版について

『博物誌』は万物の性質や状態について書き記した百科事典として古来読み継がれてきた。本書は全37巻からなり、第１巻はウェスパシアヌス帝（Titus Flavius Vespasianus, 在位69-79）へ献呈した序文で始まり、２巻から37巻までの章立てと各巻ごとの参考文献の著者の一覧からなる。1525年バーゼル版の第１巻に基づいて本書の内容を記すと次のようになる。

第２巻「宇宙、気象、大地」、第３-６巻「位置、種族、海、都市、港、山、川、面積、そこに居住してきた民族」、第７巻「驚くべき姿をした種族」、第８巻「歩行する陸棲動物の性質」、第９巻「水棲動物誌」、第10巻「鳥類誌」、第11巻「小動物と爬虫類誌」、第12巻「樹木」、第13巻「香木と海浜の樹木」、第14巻「ブドウ樹とワイン」、第15巻「果樹と栽培樹の性質」、第16巻「森林樹」、第17巻「種を播き植栽された樹木の性質」、第18巻「農業」、第19巻「亜麻の性質と驚くべきこと」、第20巻「菜園で育てられた薬」、第21巻「花と花輪の性質」、第22巻「植物の有用性」、第23巻「粗野な樹木」、第24巻「森林樹由来の薬」、第25巻「自生する植物の性質、植物の有用性とその使用の起源」、第26巻「病気の種類によるその他の薬と新しい病気」、第27巻「その他の種類の植物」、第28-30巻「動物由来の薬」、第31-32巻「水棲動物由来の薬と水の驚異」、第33巻「金属の性質」、第34巻「青銅、鉄、鉛、錫」、第35巻「絵画の栄誉」、第36巻「石の性質と大理石の贅沢さ」、第37巻「宝石の起源」。

ローマ帝国の西側の地方では古代の終焉から中世の成立に至る時代の中で、古代文献は異教の書物とみなされて、多くの写本が修道院の奥にしまい込まれて忘れられ、あるいは失われていったが[(5)]、プリニウス『博物誌』は他のいくつかのローマの文献とともに忘れ去られることなく古典として生き延びた。

15世紀中葉に活版印刷術が発明されると、『博物誌』は比較的早くから印刷されて流布した。初版は1469年でヴェネツィアのヨハン・フォン・

シュパイアー（Johann von Speyer）によって印刷された（ISTC ip00786000）。翌年にはローマのシュヴァインハイムとパンナルツ（Sweynheym, Conradus and Pannartz, Arnoldus）がヨハネス・アンドレアス（Johannes Andreas）による編集版を刊行した（ISTC ip00787000）。1476年には人文主義者フィリッポ・ベロアルド（父）（Beroaldo, Filippo, 1453-1505）が最初の校訂版をパルマのコラルス（Corallus, Stephanus）から刊行した（ISTC ip00792000）。その後ベロアルド版がパルマとヴェネツィアで５版刊行された。1496年にはブレッシアの人文主義者ジョヴァンニ・ブリタンニコ（Britannico, Giovanni, 1518没）による校訂版が彼の父ジャコモ（Britannico, Giacomo, 1506没）の印刷所から刊行され（ISTC ip00797000）、翌年には人文主義者エルモラオ・バルバロ（Barbaro, Ermolao, 1453-93）による校訂版がヴェネツィアのベナリウス（Benalius, Bernardinus）から刊行された（ISTC ip00799000）。15世紀中にラテン語版14版、フィレンツェの人文主義者クリストフォロ・ランディーノ（Landino, Cristoforo, 1425-1498）によるイタリア語訳が３版刊行された（初版はヴェネツィア、1476年：ISTC ip00801000）[(6)]。

16世紀に入ると『博物誌』はイタリアばかりでなく、ドイツ、フランスでも全巻あるいは部分が印刷出版されて大いに流布された。1507年ヴェネツィア版の校訂はパドヴァ大学の解剖学者ベネデッティ（Benedetti, Alessandro, 1512没）が行い（EDIT 15 CNCE 29657）、1514年ウィーン版は修道僧カメルス（Camers, Johannes, 1448-1546）の手になるものであった（VD 16 P 3526）。また、1524年のケルン版は人文主義者カエサリウス（Caesarius, Johann, 1468頃-1550）により校訂され（VD 16 P 3531）、1525年のバーゼル版はエラスムス（Erasmus, Desiderius, 1466-1536）によるものであった（上記の書誌記述参照）。さらに、1535年のバーゼル版はジグムント・ゲレン（Gelen, Sigmund, 1497-1554）によるものである（VD 16 P3537）。このように『博物誌』は各地で校訂が行われて普及していった。USTC によれば、『博物誌』は16世紀中に単独で刊行された全巻、一部分、翻訳が159版ある。そのうちパリで55版、リヨンで28版、ヴェネツィアで23版、フランクフルト・アム・

マインで９版、バーゼルで８版刊行された。言語別ではラテン語120版、フランス語訳22版、イタリア語訳11版、ドイツ語訳５版、スペイン語訳１版である(7)。

５．1525年バーゼル版『博物誌』の印刷出版者フローベンについて

1525年バーゼル版『博物誌』は16世紀前半のバーゼルで最も有力な印刷家であったヨハン・フローベン（Froben, Johann, 1460頃-1527）が1525年３月に刊行したものである。フローベンはニュルンベルクのアントン・コーベルガー（Koberger, Anton, 1440/45-1513）のもとで修業した後にバーゼルへ移り、1490年に印刷所を開設して、翌年八折判の聖書（ISTC ib00592000）を刊行して、印刷業をスタートさせた。彼はバーゼルの印刷業者ペトリ（Petri, Johann, 1441-1511）やバーゼル最大の印刷所を経営したアマーバッハ（Amerbach, Johann, 1441頃-1513）と共同出版を行ってバーゼルの印刷業を大いに発展させた。フローベンはコーベルガーに倣って当初は聖書、神学書、教会法書等を主力商品として印刷所を経営した。1513年にアマーバッハが亡くなるとフローベンはアマーバッハの印刷所を継承して、バーゼル印刷業界の中心的な存在になった。フローベンのもとには人文主義者ベアトゥス・レナヌス（Rhenanus, Beatus, 1485-1547）や後にバーゼルの宗教改革者となるヨハネス・エコランパディウス（Ökolampadius, Johannes, 1482-1531）、上記のジグムント・ゲレン等が集まり、編集・校正を行った。そして、画家のホルバイン父子（Holbein, Hans, 父1460-1524, 子1497-1543）が木版の挿絵や標題紙を装飾するボーダーを提供した。

フローベンはヴェネツィアの学匠印刷家アルド・マヌーツィオ（Manuzio, Aldo, 1450頃-1515）の影響を受けて人文主義書を刊行するようになった。そのきっかけは、彼が1513年にエラスムスの主著『格言集 Adagia』（VD 16 E 1931）を、アルド・マヌーツィオが1508年に刊行した増補版『格言集』

に基づいて刊行したことである。この出版は著者エラスムスに無断で行われたものであった[8]。エラスムスはアルド版『格言集』のさらなる改訂増補版をパリのジョス・バード（Bade, Josse, 1461/62-1535）から刊行しようとしていた矢先であった。著作権という考え方がなかった当時はこのような海賊版の出版は日常茶飯事であった。エラスムスはこの機会にバーゼルで改訂増補した『格言集』を上梓しようと考えて1514年にバーゼルに赴き、1515年にフローベン印刷所から『格言集』改訂増補版を刊行した（VD 16 E 1933）。バードの印刷所ではなくフローベンから刊行するに至った経緯にはエラスムス自身の誤解があったとも言われている[9]。格言の数は、1513年フローベン版が依拠した1508年アルド版において3,260件であったが[10]、1515年フローベン版では3,400件に増補されている。また、1513年版の本文が249葉（498ページ分）であり、1515年版の本文が634ページであることから、ページ数換算で130ページほど増加していた。

1515年にフローベンは『格言集』を再版したばかりか（VD 16 E 1934）、エラスムスが校訂した古代ローマの哲学者セネカ（Seneca, Lucius Annaeus, 前５頃-後65）の『クラウディウス・カエサルの死 De morte Claudij Caesalis』（VD 16 S 5804）と『セネカ全集 Lucij Annaei Senecae sanctissimi philosophi lucbrationes omnes』（VD 16 S 5758）、さらにエラスムスの他の著作２点（VD 16 E 2544, S3132）を刊行した。しかも、それらのうち『格言集』の２版と『セネカ全書』はバーゼル最初のページ付け本であった。翌16年にもフローベンはエラスムスの編著を５書刊行している。その中には校訂本『ギリシア語新約聖書 Novum Instrumentum』（初版）（VD 16 B 4196）および『聖ヒエロニュムス全集 Omnium operarum Divi Eusebii Hieronymi Stridonensis』（VD 16 H3482）が含まれている。『ギリシア語新約聖書』にもページ付けが行われた。

本稿「８．フローベンのページ付け本」で詳述するが、ページ付け印刷本を史上最初に刊行したのはアルド・マヌーツィオであり、アルドの次にページ付け本を1514年に刊行したのはフィレンツェのフィリッポ・ジュン

タ（Giunta, Filippo, 1450/56頃-1517）である。ジュンタに続いて1515年にページ付け本を刊行したのがバーゼルのフローベンであった。フローベンはその後ページ付け本を積極的に刊行するようになり、バーゼルにおけるページ付け本普及の中心的な役割を果たした。したがって、フローベンによるページ付け本は書誌学上でも、書物発達の歴史においても非常に重要である。

こうして、フローベンとエラスムスの関係は極めて密接になり、それ以降フローベンはエラスムスの著作の出版人の役割を果たすようになった。フローベンは共同出版も含めて生涯に360版の書物を刊行した。そのうちエラスムスの著書、訳書、校訂本、あるいはエラスムスが何らかの形で関与した書物は211版あり、フローベン刊行書全体の58.6％を占めている。一方、エラスムスの論敵となったルターの著作の出版はわずか４点にすぎない。宗教改革が始まるとルターの著作はドイツ各地で一斉に印刷されて飛ぶように売れた。ドイツ語圏のバーゼルでもルターの著作が1527年までに156版も刊行されていたことを考慮すると、フローベンがいかにエラスムスの著作を世に送り出すことに尽力していたかがよくわかる。

６．1525年バーゼル版『博物誌』の校訂者エラスムス

1525年バーゼル版『博物誌』はエラスムスによる校訂であった。エラスムスはロッテルダム出身で、ネーデルラントの僧院で若き日をすごした後、1499-1500年にイングランド、1500-01年パリとオルレアン、1501-04年ネーデルラント、1504-05年パリ、1506-09年イタリア、1509-14年再びイングランドと遍歴して学問を深めた[11]。とりわけ、1508年に９か月にわたって滞在したヴェネツィアのアルド・マヌーツィオの工房ではアルドが所蔵するギリシア語資料を参照しながら『格言集』のテキストの改訂増補を行い、索引の編集にも取り組んだ。そればかりでなく、その時アルドの工房で刊行されたページ付け本をエラスムスは実見していたはずであり、さらに当

時印刷中であったページ付け本も見ていた可能性が大きい。

前節で述べたように、エラスムスは1514年８月にバーゼルに赴き、フローベンの工房に滞在し、『格言集』のさらなる改訂増補版を編集してフローベンから刊行した。さらに、かつてルーヴェン近郊の修道院で見つけた人文主義者ロレンツォ・ヴァッラ（Valla, Lorenzo, 1407-57）の新約聖書注釈の写本に大きな刺激を受けて、『ギリシア語新約聖書』の校訂を完成させようとしていた。エラスムスはバーゼルで集めたギリシア語新約聖書写本に基づいて新約聖書を校訂し、そのラテン語対訳を付けた『ギリシア語新約聖書』を1516年にフローベンから上梓した。エラスムスは当初この『ギリシア語新約聖書』をアルド印刷所から刊行しようと考えていたという[12]。エラスムスはフローベンの工房のレナヌスやエコパンパディウスとすぐに親しくなり、また桂冠詩人のグラレアン（Glarean, Heinrich, 1488-1563）、神学者のカピト（Capito, Wolfgang Faber, 1478頃-1541）やヘディオ（Caspar, Hedio, 1494-1552）等とも知り合って、彼らのサークルの中心的な存在となった[13]。グラレアンを通じてエラスムスはバーゼルで研究を続けていたツヴィングリ（Zwingli, Huldrych, 1481-1531）とも知り合いになった[14]。エラスムスは彼らの中でも特にレナヌスと親しくなり、以降レナヌスはエラスムスの著書、訳書、校訂本の編集者として才能を発揮した。

エラスムスは1516年５月までバーゼルに滞在した後[15]、ライン川を下ってフランクフルトを経由してネーデルラント南部に向かい、1517年７月にルーヴェン大学神学部に職を得た。そして、1518年５月に再びバーゼルを訪問して、『ギリシア語新約聖書』第２版改訂版と『キリスト教兵士の手引き Enchiridion militis christiani』新版の準備を行った[16]。その間にもエラスムスの著作は初版、再版を含めてヨーロッパ各地の印刷所から続々と刊行された。

1517年にルター（Luther, Martin, 1483-1546）がローマ・カトリック教会の贖宥状の販売に反対を唱えて95か条の提題をヴィッテンベルクで発表すると、当初はエラスムスもルターの主張を支持したが、ルターの過激な行動

を容認できなかったエラスムスはルターに対する態度を曖昧にしたため、彼はルターとの論争に巻き込まれていった。教皇からルター取り締まりの勅書を受け取ったルーヴェン大学は反ルターの立場を鮮明にしたため、ルターに影響を与えた異端者とみなされるようになったエラスムスもこの地に留まることが許されなくなった[17]。1521年にバーゼルに逃避して、フローベンの庇護のもとでバーゼルに居を定めた。VD 16によれば、1521年から彼がバーゼルを去ってフライブルク・イム・ブライスガウに転居した1529年までの間にフローベン印刷所（フローベンは1527年に亡くなり、後継者が印刷所を経営していた）から刊行されたエラスムスの著書、校訂本、訳書は初版・再版を含めて145版に上るが、そのうち87版が初版であった[18]。フローベン印刷所がエラスムスの旺盛な執筆活動を支えていたことがよくわかる。

エラスムスは自身の著作の執筆と同時に、ギリシア・ローマの古典から新約聖書、初期教父の著作集、15世紀の人文主義者さらには友人のトマス・モア（More, Thomas, 1478-1535）の著作に至るまで54種の著者およびタイトルの書物の校訂・翻訳を行った[19]。このような研究活動の一環として1525年版プリニウス『博物誌』も位置づけられる。エラスムスはフローベンの印刷所をしばしば訪れて自身の著作に関して印刷技術面にも関わり、直接監督したという[20]。

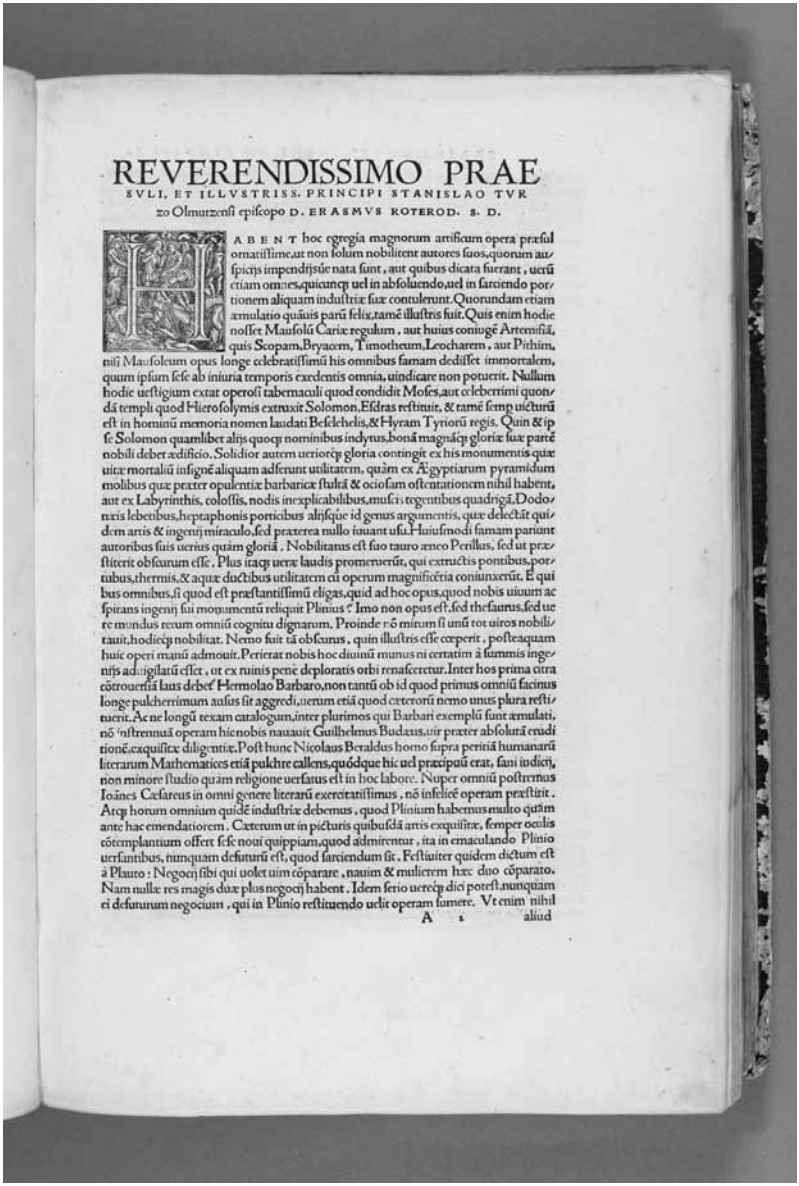
７．1525年バーゼル版『博物誌』の構成

1525年バーゼル版『博物誌』の標題紙（A1^{r}）の最初の２行“IOANNES FROBENIVS LECTORI S.D. | EN DAMVS”はこの時代の書名の常套句で、「読者の皆様ヨハン・フローベンがご挨拶申し上げます。さあ、提供しましょう」という呼びかけである。続く３-４行目に本書の著者名と書名が次のように記されている。“C. PLINII SECVNDI DI|VINVM OPVS CVI TITVTVS, HISTORIA MVNDI”（以下略）（世界誌という書名のC. プリニウス・セクンドゥスの素晴らしい作品、...）とある。つまり、本書は『博物誌

Historia naturalis』と呼びならわされているが、エラスムス版では『世界誌 Historia mundi』という書名が採用されている。続く11行で本書の成り立ちを説明している。特にバルバロ校訂版を強調していることから、エラスムスはその版を最も参考にしたことは明らかである。そして、“Additus est index, in quo nihil desideres.”（追加は何の不足もない索引です。）として索引付きであることを明記している。その下にはフローベン印刷所の商標が置かれ、さらにその下に“Basileae apud Io. Frobenium, Mense | Martio. An. M.D. XXV.”（バーゼルのヨハン・フローベンにて、1525年３月）とある（図１参照）。つまり、この標題紙には著者名、書名、出版地、出版者名、出版年が明記されており、近代的な標題紙の要素が盛り込まれている。

続いて、序文（A2^{r}）ではエラスムスがオルミュツ（現チェコ東部のオモロウツ）の司教トゥルゾ（Thurzo, Stanislaus, bishop of Olmütz, 1540没）に献辞を捧げて、『博物誌』校訂の経緯を説明している（図３）。このように序文で個人名を挙げて顕彰する場合は、それは出版を許可した人物、出版に出資した人物、出版を支援した人物である場合が一般的であるが、本書の場合は、エラスムスによるトゥルゾへの返礼であった。スタニスラウス・トゥルゾはボヘミアの大実業家ヨハネス・トゥルゾ（Thurzo, Johannes, 1437-1508）の長子で、クラクフ大学に学び、モラヴィアのオロモウツ司教になった人物である。彼はポーランド、ハンガリー、シレジアの学者たちのサークルに仲間入りし、そしてハンガリーのブダで人文主義者ヤーコプ・ピーゾ（Piso, Jacob, 1527没）が主宰していたエラスムス心酔者たちのサークルの一員となった。そこでピーゾを通じてエラスムスの庇護者の一人であるウルシヌス・ウェリウス（Ursinus Velius, Kaspar, 1493-1539）と知り合った。エラスムスが1521年にバーゼルへ転居すると、トゥルゾはウルシヌス・ウェリウスを通じて贈り物をエラスムスに送った。その返礼として、エラスムスは本書の序文でトゥルゾに献辞を捧げて感謝の気持ちを伝えたのである[21]。

続いて、本稿「３．著者プリニウスについて」で言及した小プリニウス



REVERENDISSIMO PRAE
SVLI, ET ILLVSTRISS. PRINCIPI STANISLAO TVR
zo Olmutzensi episcopo D. ERASMVS ROTEROD. S. D.

HABENT hoc egregia magnorum artificum opera præsul ornatissime,ut non solum nobilitent autores suos,quorum auspicijs impendijsúe nata sunt, aut quibus dicata fuerant, uerũ etiam omnes,quicunq uel in absoluendo,uel in farciendo portionem aliquam industriæ suæ contulerunt. Quorundam etiam æmulatio quãuis parũ felix,tamẽ illustris fuit. Quis enim hodie nosset Mausolũ Cariæ regulum, aut huius coniugẽ Artemisiã, quis Scopam,Bryaxem, Timotheum,Leocharem, aut Pithim, nisi Mausoleum opus longe celebratissimũ his omnibus famam dedisset immortalem, quum ipsum sese ab iniuria temporis exedentis omnia, uindicare non potuerit. Nullum hodie uestigium extat operosi tabernaculi quod condidit Moses,aut celeberrimi quondã templi quod Hierosolymis extruxit Solomon. Esdras restituit, & tamẽ semp uicturũ est in hominũ memoria nomen laudati Beselehelis,& Hyram Tyriorũ regis. Quin & ipse Solomon quamlibet alijs quoq nominibus indytus,bonã magnãq gloriæ suæ partẽ nobili debet ædificio. Solidior autem uerioreq gloria contingit ex his monumentis quæ uitæ mortaliũ insignẽ aliquam adferunt utilitatem, quãm ex Ægyptiarum pyramidum molibus quæ præter opulentiæ barbaricæ stultã & ociosam ostentationem nihil habent, aut ex Labyrinthis, colossis, nodis inexplicabilibus,muscis tegentibus quadrigã,Dodonæis lebetibus,heptaphonis porticibus alijsque id genus argumentis, quæ delectãt quidem artis & ingenij miraculo,sed præterea nullo iuuant usu.Huiusmodi famam pariunt autoribus suis uerius quãm gloriã. Nobilitatus est suo tauro æneo Perillus, sed ut præstiterit obscurum esse. Plus itaq ueræ laudis promeruerũt, qui extructis pontibus,portubus,thermis,& aquæ ductibus utilitatem cũ operum magnificẽtia coniunxerũt. E quibus omnibus,si quod est præstantissimũ eligas,quid ad hoc opus,quod nobis uiuum ac spirans ingenij sui monumentũ reliquit Plinius? Imo non opus est,sed thesaurus,sed uere mundus rerum omniũ cognitu dignarum. Proinde nõ mirum si unũ tot uiros nobilitauit,hodieq nobilitat. Nemo fuit tã obscurus, quin illustris esse cœperit, posteaquam huic operi manũ admouit. Perierat nobis hoc diuinũ munus ni certatim à summis ingenijs adiuigilatũ esset, ut ex ruinis pene deploratis orbi renasceretur. Inter hos prima citra cõtrouersiã laus debet Hermolao Barbaro,non tantũ ob id quod primus omniũ facinus longe pulcherrimum ausus sit aggredi,uerum etiã quod cæterorũ nemo unus plura restituerit. Ac ne longũ texam catalogum,inter plurimos qui Barbari exemplũ sunt æmulati, nõ instrennuã operam hic nobis nauauit Guilhelmus Budæus,uir præter absolutã eruditionẽ,exquisitæ diligentiæ. Post hunc Nicolaus Beraldus homo supra peritiã humanarũ literarum Mathematices etiã pulchre callens,quódque hic uel præcipuũ erat, sani iudicij, non minore studio quãm religione uersatus est in hoc labore. Nuper omniũ postremus Ioãnes Cæsareus in omni genere literarũ exercitatissimus, nõ infelicẽ operam præstitit. Atq horum omnium quidẽ industriæ debemus, quod Plinium habemus multo quãm ante hac emendatiorem. Cæterum ut in picturis quibusdã artis exquisitæ, semper oculis cõtemplantium offert sese noui quippiam,quod admirentur, ita in emaculando Plinio uersantibus, nunquam defuturũ est, quod farciendum sit. Festiuiter quidem dictum est à Plauto: Negocij sibi qui uolet uim cõparare, nauim & mulierem hæc duo cõparato. Nam nullæ res magis duæ plus negocij habent. Idem serio uereq dici potest.nunquãm ei defuturum negocium, qui in Plinio restituendo uelit operam sumere. Vt enim nihil

A 2 aliud

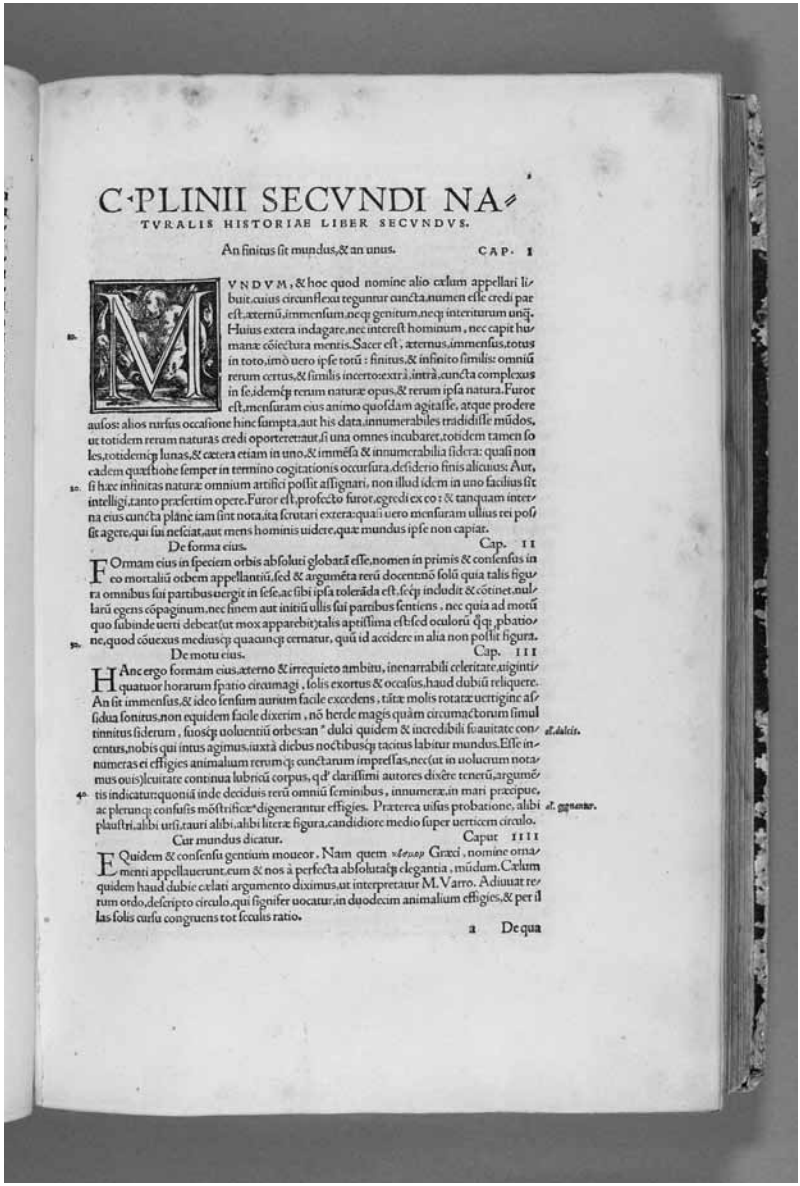
図３　早稲田大学図書館所蔵1525年バーゼル版プリニウス『博物誌』
A2r：エラスムスがスタニスラウス・トゥルゾに献辞を捧げた序文

による２通の書簡が引用されている。最初の書簡が執政官バエビウス・マケルに宛てたもので、大プリニウスの著作一覧と彼の大変真摯な学問的な態度について述べたものである（第３巻第５書簡）[22]。２番目の書簡は上述したように歴史家タキトゥスに宛てたもので、大プリニウスの最期の様子を伝えるものである（第６巻第16書簡）[23]。これら２書簡は大プリニウスの生涯を語るうえで最も重要な史料であるため、それまでもしばしば引用されてきた。1481年にパルマで刊行されたベロアルド校訂版『博物誌』の序文に引用されている（ISTC ip00793000）。1496年ブレッシアで刊行されたブリタンニコ版にも同様に引用され（ISTC ip00797000）、1498年ヴェネツィア刊行のバルバロ版にも掲載されている（ISTC ip00799000）。つまり、小プリニウスのこれら２書簡は『博物誌』の序文に掲載されることが通例であったことになり、本書の序文にこれら２書簡が引用されたことは何ら不思議ではない。

次に A5^{r} から始まる第１巻にはページ付けが行われていないが、a1^{r} から始まる第２巻から第37巻までは一貫してページ付けが行われている（図４）。ページ番号の誤植は p. 179の１か所のみで「189」となっている。このように誤植が少ないのはページ付けの印刷に慣れており、校正をかなりしっかりと行ったことを物語っている。また、第２巻から第37巻までの全ページののど側余白に10行ごとに行番号が付与されている。ページと行番号付けは巻末の索引のために付与されたと考えられよう。

2K6^{r}（p. 671）の末尾に第１番目のコロフォンが置かれ、「有名なバーゼルのヨハン・フローベン工房から、1525年３月」と記されている。（図５）。

^{2}a1^{r} から始まる索引のタイトルは“INDEX IN VNIVERSVM NATVRALIS HISTORIAE”（博物誌の全体的なる索引）と示され、巻頭のタイトルと異なっている（図６）。^{2}a1^{v} には“AD LECTOREM”（読者へ）があり、索引について説明している。索引は２つの部分からなり、第１部が天、動物、植物、草木、疾患、金属、石、宝石に関する語彙索引である。第２部が追加の索引で、その第１番目がギリシア・ローマ、バルバロイの神、英



C·PLINII SECVNDI NA-
TVRALIS HISTORIAE LIBER SECVNDVS.

An finitus ſit mundus,& an unus. CAP. I

MVNDVM, & hoc quod nomine alio cælum appellari libuit,cuius circumflexu regunturcuncta,numen eſſe credi par eſt.æternũ,immenſum,neq genitum,neq interiturum unq. Huius extera indagare,nec intereſt hominum, nec capit humanæ cõiectura mentis.Sacer eſt, æternus,immenſus,totus in toto,imò uero ipſe totũ: finitus,& infinito ſimilis: omniũ rerum certus,& ſimilis incerto:extrà,intrà,cuncta complexus in ſe,idemq rerum naturæ opus,& rerum ipſa natura.Furor eſt,menſuram eius animo quoſdam agitaſſe, atque prodere auſos: alios rurſus occaſione hinc ſumpta,aut his data,innumerabiles tradidiſſe mũdos, ut totidem rerum naturas credi oporteret:aut,ſi una omnes incubaret,totidem tamen ſoles,totidemq lunas,& cætera etiam in uno,& immẽſa & innumerabilia ſidera: quaſi non eadem quæſtione ſemper in termino cogitationis occurſura,deſiderio finis alicuius: Aut, ſi hæc infinitas naturæ omnium artifici poſſit aſſignari, non illud idem in uno facilius ſit intelligi,tanto præſertim opere.Furor eſt,profecto furor,egredi ex eo: & tanquam interna eius cuncta plãne iam ſint nota,ita ſcrutari extera:quaſi uero menſuram ullius rei poſſit agere,qui ſui neſciat,aut mens hominis uidere,quæ mundus ipſe non capiat.

De forma eius. Cap. II

FOrmam eius in ſpeciem orbis abſoluti globatã eſſe,nomen in primis & conſenſus in eo mortaliũ orbem appellantiũ,ſed & argumẽta rerũ docentiũ ſolũ quia talis figura omnibus ſui partibus uergit in ſeſe,ac ſibi ipſa tolerãda eſt.ſecq includit & cõtinet.nullarũ egens cõpaginum,nec finem aut initiũ ullis ſui partibus ſentiens, nec quia ad motũ quo ſubinde uerti debeat(ut mox apparebit)talis aptiſſima eſt:ſed oculorũ q̃q pbatione,quod cõuexus mediuſq quaquaq cernatur, quũ id accidere in alia non poſſit figura.

De motu eius. Cap. III

HAnc ergo formam eius,æterno & irrequieto ambitu, inenarrabili celeritate,uiginti quatuor horarum ſpatio circumagi, ſolis exortus & occaſus,haud dubiũ reliquere. An ſit immenſus,& ideo ſenſum auium facile excedens, tãtæ molis rotatæ uertigine aſſidua ſonitus,non equidem facile dixerim, nõ herde magis quàm circumactorum ſimul tinnitus ſiderum, ſuoſq uoluentiũ orbes:an *dulci quidem & incredibili ſuauitate concentus,nobis qui intus agimus,iuxtã diebus noctibusq tacitus labitur mundus.Eſſe innumeras ei effigies animalium rerumq cunctarum impreſſas,nec(ut in uolucrum notamus ouis)ſcuitate continua lubricũ corpus,qd' clariſſimi autores dixẽre tenerũ,argumẽtis indicatur:quoniã inde deciduis rerũ omniũ ſeminibus, innumeræ,in mari præcipue, ac plerunq confuſis mõſtrificæ*digenerantur effigies. Præterea uiſus probatione, alibi plauſtri,alibi urſũ,tauri alibi,alibi literæ figura,candidiore medio ſuper uerticem circulo.

*al.dulcis.

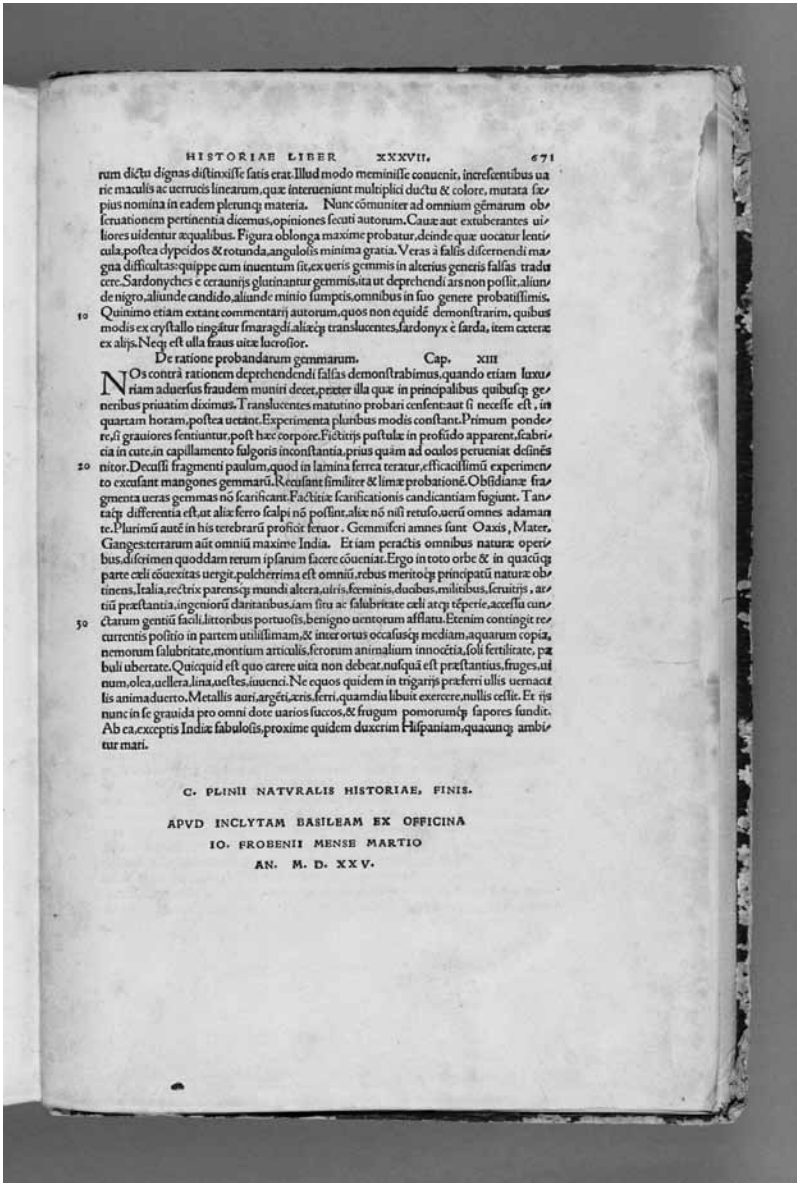
*al. gignuntur.

Cur mundus dicatur. Caput IIII

EQuidem & conſenſu gentium moueor. Nam quem κόσμον Græci, nomine ornamenti appellauerunt,eum & nos à perfecta abſolutaq elegantia, mũdum.Cælum quidem haud dubie cælati argumento diximus,ut interpretatur M.Varro. Adiuuat rerum ordo,deſcripto circulo,qui ſignifer uocatur,in duodecim animalium effigies,& per illas ſolis curſu congruens tot ſeculis ratio.

a De qua

図４　早稲田大学図書館所蔵1525年バーゼル版プリニウス『博物誌』
a1r（p. 1）：『博物誌』第２巻の冒頭ページ



HISTORIAE LIBER XXXVII. 671

rum dictu dignas distinxisse satis erat. Illud modo meminisse conuenit, increscentibus uarie maculis ac uerrucis linearum, quæ interueniunt multiplici ductu & colore, mutata sæpius nomina in eadem plerunq; materia. Nunc cõmuniter ad omnium gẽmarum obseruationem pertinentia dicemus, opiniones secuti autorum. Cauæ aut extuberantes uiliores uidentur æqualibus. Figura oblonga maxime probatur, deinde quæ uocatur lenticula, postea dypeidos & rotunda, angulosis minima gratia. Veras à falsis discernendi magna difficultas: quippe cum inuentum sit, ex ueris gemmis in alterius generis falsas tradere. Sardonyches è ceraunijs glutinantur gemmis, ita ut deprehendi ars non possit, aliunde nigro, aliunde candido, aliunde minio sumptis, omnibus in suo genere probatissimis. Quinimo etiam extant commentarij autorum, quos non equidẽ demonstrarim, quibus modis ex crystallo tingãtur smaragdi, aliæq; translucentes, sardonyx è sarda, item cæteræ ex alijs. Neq; est ulla fraus uitæ lucrosior.

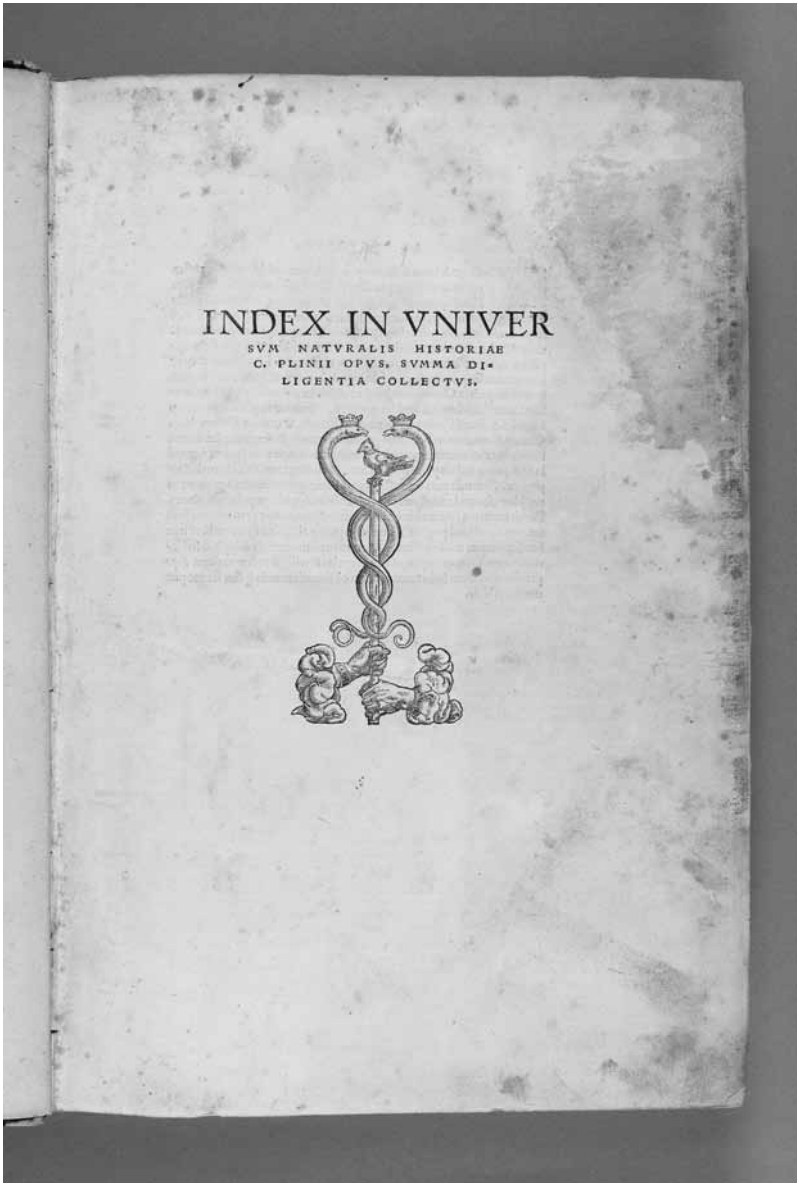
De ratione probandarum gemmarum. Cap. XIII

NOs contrà rationem deprehendendi falsas demonstrabimus, quando etiam luxuriam aduersus fraudem muniri decet, præter illa quæ in principalibus quibusq; generibus priuatim diximus. Translucentes matutino probari censent: aut si necesse est, in quartam horam, postea uertant. Experimenta pluribus modis constant. Primum ponderẽ, si grauiores sentiuntur, post hæc corpore. Fictitijs pustulæ in profundo apparent, fabricia in cute, in capillamento fulgoris inconstantia, prius quãm ad oculos perueniat desinẽs nitor. Decussi fragmenti paulum, quod in lamina ferrea teratur, efficacissimũ experimẽto excusant mangones gemmarũ. Recusant similiter & limæ probationẽ. Obsidianæ fragmenta ueras gemmas nõ scarificant. Factitiæ scarificationis candicantiam fugiunt. Tantaq; differentia est, ut aliæ ferro scalpi nõ possint, aliæ nõ nisi retuso, uerũ omnes adamante. Plurimũ autẽ in his terebrarũ proficit feruor. Gemmiferi amnes sunt Oaxis, Mater, Ganges: terrarum aũt omniũ maxime India. Et iam peractis omnibus natura operibus, discrimen quoddam rerum ipsarum facere cõueniat. Ergo in toto orbe & in quacũq; parte cæli cõuexitas uergit, pulcherrima est omniũ, rebus meritoq; principatũ naturæ obtinens, Italia, rectrix parensq; mundi altera, utris, feminis, ducibus, militibus, seruitijs, artiũ præstantia, ingeniorũ dãitatibus, iam situ ac salubritate cæli atq; tẽperie, accessu cunctarum gentiũ facili, littoribus portuosis, benigno uentorum afflatu. Etenim contingit recurrentis positio in partem utilissimam, & inter ortus occasusq; mediam, aquarum copia, nemorum salubritate, montium articulis, ferorum animalium innocẽtia, soli fertilitate, pabuli ubertate. Quicquid est quo carere uita non debeat, nusquã est præstantius, fruges, uinum, olea, uellera, lina, uestes, iuuenci. Ne equos quidem in trigarijs præferri ullis uernaculis animaduerto. Metallis auri, argẽti, æris, ferri, quam diu libuit exercere, nullis cessit. Et ijs nunc in se grauida pro omni dote uarios succos, & frugum pomorumq; sapores fundit. Ab ea, exceptis Indiæ fabulosis, proxime quidem duxerim Hispaniam, quacunq; ambitur mari.

C. PLINII NATVRALIS HISTORIAE, FINIS.

APVD INCLYTAM BASILEAM EX OFFICINA
IO. FROBENII MENSE MARTIO
AN. M. D. XXV.

図５　早稲田大学図書館所蔵1525年バーゼル版プリニウス『博物誌』
2K6^{r}（p. 671）：本文末尾に最初のコロフォンが印刷されている。



INDEX IN VNIVER
SVM NATVRALIS HISTORIAE
C. PLINII OPVS, SVMMA DI-
LIGENTIA COLLECTVS.

図６　早稲田大学図書館所蔵1525年バーゼル版プリニウス『博物誌』
^{2}a1^{r}：索引の標題紙

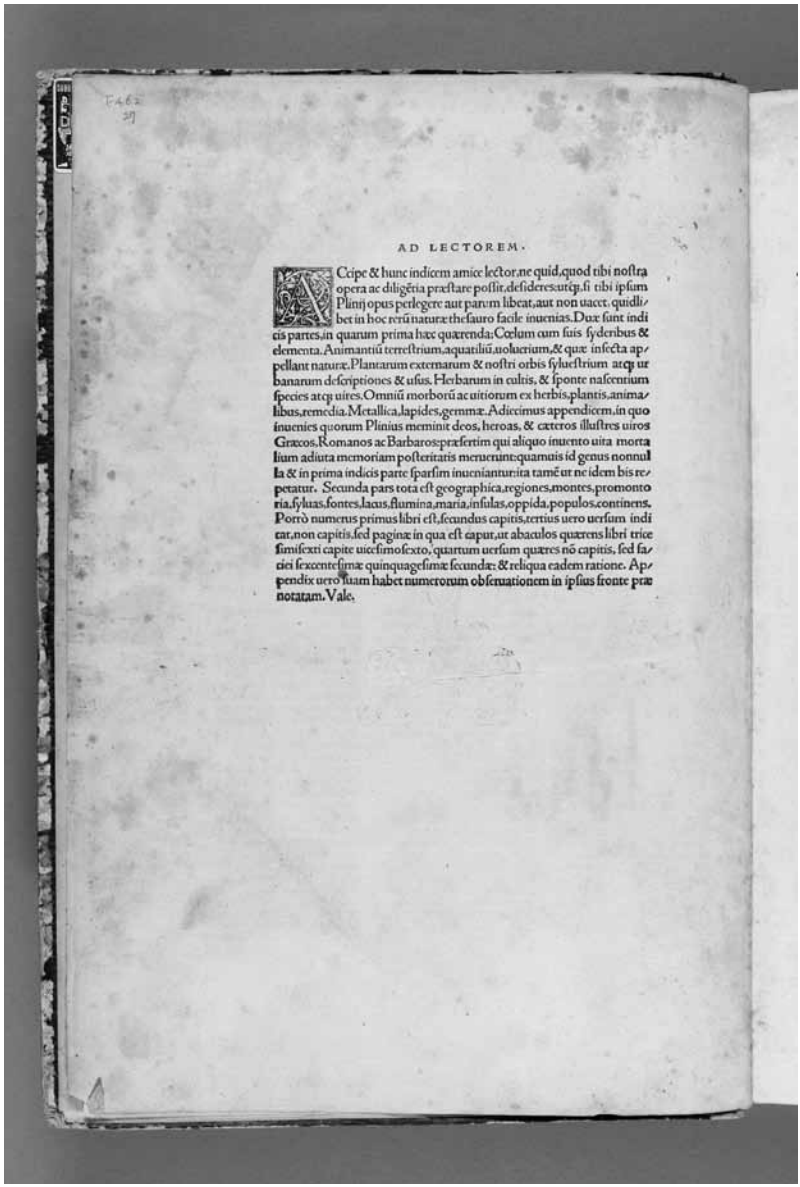
雄、その他傑出した人物の索引で、２番目が「地方、山、岬、森林、泉、湖、川、海、島、町、民族、大陸」という地理学索引である。さらに、「最初の数字が巻（libri）、２番目が章（capitis）、３番目が行（versum）を示し、章が示されない場合は章のあるページ（paginae）である。例えば、36巻26章の“abaculos”を捜すと、章のない652面（faciei）の４行目に求められる。」と説明している（図７）。

^{2}a2^{r} から上記の第１部の用語索引で、最初に索引の数字が再び説明されている。「１番目の数字は巻を示し、２番目は章、３番目はマージンに指示された行（lineam）、４番目は長くなった章では葉の一方の面（faciem alteram foliorum）を示している。」索引は３欄組である（図８）。^{2}h4^{v} から第２部の追加の索引の１番目で人名索引である。そして、^{3}A1^{r} から第２部の追加の索引の２番目の地理学索引となる。ここから４欄組となる。^{3}C5^{v} は７欄組でキャッチワードの一覧である。

本書を編集したレナヌスは第２巻から最後の37巻までに丁寧にページ付けを行い、各ページに行番号を10行ごとに付与した。しかし、索引ではそれぞれの語彙の位置は基本的に巻、章、行で示され、章の番号が示されていないページに限ってページ番号を副次的に使用している。レナヌスはなぜ単純にページと行の番号で示さなかったのであろうか。

８．フローベンのページ付け本について

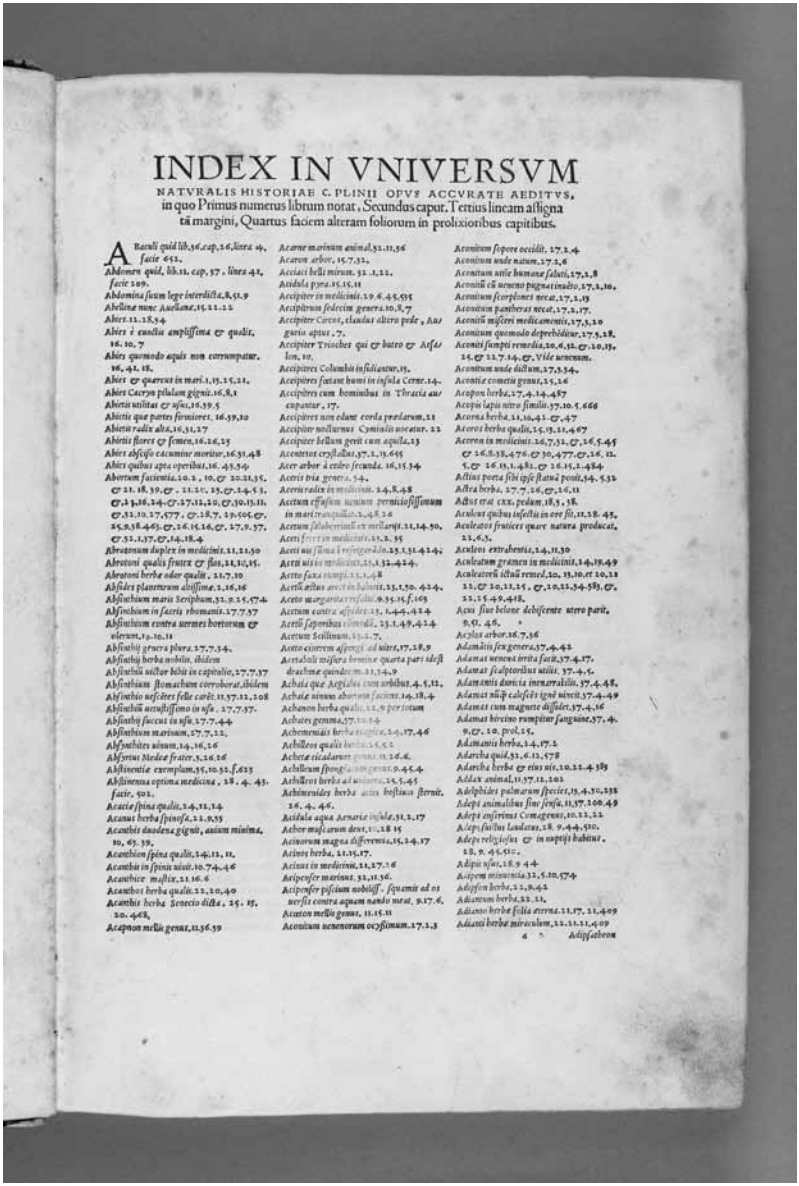
史上最初のページ付け印刷本はヴェネツィアのアルド・マヌーツィオが1499年に刊行したペロッティ（Perotti, Niccolò, 1429/30-80）『豊穣の角 Cornucopiae』（ISTC ip00296000）である[24]。筆者の調査によれば、アルドは1514年までに17書のページ付け本を刊行した。アルドに続いてページ付け本を刊行したのはフィレンツェのフィリッポ・ジュンタ（Giunta, Filippo, 1518没）である。彼は、アルド版クリュソロラス（Chrysoloras, Manuel, 1350頃-1415）『ギリシア語文法 Erotemata Chrysolorae』（1512年刊行）（EDIT 16



AD LECTOREM.

ACcipe & hunc indicem amice lector, ne quid, quod tibi nostra opera ac diligẽtia præstare possit, desideres: utq; si tibi ipsum Plinij opus perlegere aut parum libeat, aut non uacet, quidlibet in hoc rerũ naturæ thesauro facile inuenias. Duæ sunt indicis partes, in quarum prima hæc quærenda: Cœlum cum suis syderibus & elementa. Animantiũ terrestrium, aquatiliũ, uolucrium, & quæ insecta appellant naturæ. Plantarum externarum & nostri orbis syluestrium atq; urbanarum descriptiones & usus. Herbarum in cultis, & sponte nascentium species atq; uires. Omniũ morborũ ac uitiorum ex herbis, plantis, animalibus, remedia. Metallica, lapides, gemmæ. Adiecimus appendicem, in quo inuenies quorum Plinius meminit deos, heroas, & cæteros illustres uiros Græcos, Romanos ac Barbaros: præsertim qui aliquo inuento uita mortalium adiuta memoriam posteritatis meruerunt: quamuis id genus nonnulla & in prima indicis parte sparsim inueniantur: ita tamẽ ut ne idem bis repetatur. Secunda pars tota est geographica, regiones, montes, promontoria, syluas, fontes, lacus, flumina, maria, insulas, oppida, populos, continens. Porrò numerus primus libri est, secundus capitis, tertius uero uersum indicat, non capitis, sed paginæ in qua est caput, ut abaculos quærens libri tricesimisexti capite uicesimosexto, quartum uersum quæres nõ capitis, sed faciei sexcentesimæ quinquagesimæ secundæ: & reliqua eadem ratione. Appendix uero suam habet numerorum obseruationem in ipsius fronte prænotatam. Vale.

図７　早稲田大学図書館所蔵1525年バーゼル版プリニウス『博物誌』
　　$^{2}a1^{v}$：「読者へ」



INDEX IN VNIVERSVM

NATVRALIS HISTORIAE C. PLINII OPVS ACCVRATE AEDITVS, in quo Primus numerus librum notat, Secundus caput, Tertius lineam assigna tã margini, Quartus faciem alteram foliorum in prolixioribus capitibus.

A Baculi quid lib.36.cap.26.linea 4. facie 653.
Abdomen quid, lib.11. cap.37. lines 42. facie 209.
Abdomina suum lege interdicta.8.51.9
Abelinæ nunc Auellanæ.15.22.22
Abies.11.18.54
Abies è cunctis amplissima & qualis. 16.10.7
Abies quomodo aquis non corrumpatur. 16.42.18.
Abies & quercus in mari.13.15.21.
Abies Cretyn phalum gignit.16.8.1
Abietis mititas & usu,15.19.5
Abietis que pactes formiores. 16.59.10
Abietis radix alta,16.51.27
Abietis flores & semen.16.26.25
Abies abscisa cacumine moritur.16.51.48
Abies quibus apta operibus.16.45.54
Abortum faciunta.10.2.10.& 20.21.51. & 21.18.39.& 22.10.25.& 24.5.2. & 34.16.24.& 37.12.20.& 30.15.11. & 32.10.27.577. & 18.7. 19.505.& 25.9.38.463. & 26.15.16.& 27.8.37. & 32.1.37.& 14.18.4
Abrotanum duplex in medicina.11.21.30
Abrotoni qualis frutex & flos,11.10.15.
Abrotoni herba odor qualis. 21.7.10
Absides platanorum altissimæ.2.16.16
Abshinthium maris Scriphum.31.9.15.574
Abshinthium in sacris romanis.27.7.37
Abshinthium contra uermes bouorum & olerum,19.10.11
Abshinthij genera plura.27.7.34.
Abshinthij herba nobilis. ibidem
Abshinthij uictor bibi in capitolio,27.7.37
Abshinthium stomachum corroborat.ibidem
Abshinthio nescites felle carêt.11.37.11.108
Abshinthiũ necessitissimo in usu. 27.7.37.
Abshinthij succus in usu.27.7.44
Abshinthium marinum. 27.7.22.
Abshinthes uinum.14.16.16
Abstrusi Medea frater.5.26.16
Abstinentiæ exemplum,35.10.35.f.623
Abstinentia optima medicina. 28. 4. 45. facie. 502.
Acacia spina qualis.24.22.14
Acanus herba spinosa.22.9.55
Acanthis duodena gignit, autem minima. 10. 63. 39.
Acanthion spina qualis.24.22.11.
Acanthe in spinis uiuit.10.74.46
Acanthice mastix,22.16.6
Acanthos herba qualis.22.20.40
Acanthis herba Senecio dicta. 25. 15. 20. 463.
Acapnon mellis genus.11.56.59
Acarne marinum animal.32.11.56
Acaron arbor. 15.7.32.
Acciaci belli mirum. 32.2.22.
Acidula pyra.15.15.11
Accipiter in medicinis.29.6.45.635
Accipitrum fœdcrim genera.10.8.7
Accipiter Cæcus, claudus altero pede, hunguio aptus. 7.
Accipiter Trioches qui & buteo & Asseton. 10.
Accipitres Columbis insidiantur.15.
Accipitres fœtum humi in insula Cerne.14.
Accipitres cum hominibus in Thracia aut capuntur. 17.
Accipitres non edunt corda prælarum.22
Accipiter noctiuus Cynnisilis uocatur. 22
Accipiter bellum gerit cum aquila.23
Acentetos crystallus.37.2.13.655
Acer arbor à cedro fecunda. 16.15.34
Acerii tria genera. 54.
Acerii radix in medicinis. 24.8.48
Acetum effusum uinum perniciosissimum in mari tempestatis.2.48.26
Acetum salubrius ex mellarijs.22.14.30.
Aceti fœcis in medicina.21.2.35
Aceti uis sima à refrigeratio.23.13.424.
Aceti uis in medicina.23.13.424.
Aceto saxa rumpi.23.2.48
Acetabulum aceti in habuit.23.13.30. 424.
Aceto margaritæ resolui.9.35.16.f.165
Acetum contra aspides.23. 1.44.424
Acetũ saporibus commodi. 23.1.49.424
Acetum Scillinum.23.2.7.
Aceto cinerem aspergi ad uiteis.17.28.9
Acetabula mistura bromise quarta pari sicut drachmæ quinque.21.3.4.9
Achaia quæ Argolas cum urbibus.4.5.12.
Achaiæ ninum aborum facions.14.18.4
Achanon herba qualis.22.9 per totum
Achates gemma.37.10.14
Achemenidis herba magica.24.17.46
Achilleos qualis herba.25.5.2
Achetæ cicadarum genus.11.26.6.
Achilleum stromachum genus.9.45.4
Achilleos herba ad uiuiscra.25.5.45
Achimenides herba aliis hostica sternit. 26. 4. 46.
Acidula aqua Aenarie insulæ.31.2.17
Achor masculum dens.11.28.15
Acinorum magna differentia.15.14.17
Acinos herba. 22.15.17.
Acinus in medicina.22.27.16
Acipenser marinus. 32.11.56.
Acipenser piscium nobilissimus. squamis ad os versis contra aquam nando nitat. 9.17.6.
Acinon mellis genus. 11.15.11
Aconitum uenenorum occysimum.17.2.3
Aconitum sopore occidit. 27.2.4
Aconitum unde natum.17.2.6
Aconitum utile humanæ saluti.17.2.8
Aconitũ cũ uenenu pugnat in uobis.17.2.10.
Aconitum scorpiones necat.17.2.13
Aconitum panthera necat.17.2.17.
Aconitũ miseri medicamenti.17.3.10
Aconitum quomodo deprehditur.17.3.18.
Aconiti sumpti remedia.20.6.32.& 20.13. 15.& 22.7.14.& 27.Vide uenenum.
Aconitum unde dictum.17.3.34.
Acontia cometis genus.15.2.6
Acopon herba.17.4.14.487
Acopis lapis nitro similis.37.10.5.666
Acorna herba.21.16.42.& 27.47
Acoros herba qualis.24.15.21.467
Acoron in medicina.22.7.32.& 26.5.45 & 26.8.38.476.& 30.477.& 26.12. 5.& 26.13.1.482.& 26.15.2.484
Actius poeta sibi ipse statua posuit.34. 532
Actea herba. 27.7.26.& 26.21
Actiu erat CXX. pedum.18.5.38.
Aculeat quibus insectis in ore sit.11.28. 45.
Aculeatos frutices quare natura producat. 22.6.3.
Aculeos extrahentis.24.11.30
Aculeatum granum in medicina.14.19.49
Acaluteriũ idtuũ remed.20.18.10.& 20.22 22.& 20.22.25. & 20.22.34.583.& 22.15.4.49.418.
Acis siue belone dehiscente utero parit. 9.9. 46.
Acylos arbor.16.7.36
Adamãtis sex genera.37.4.42
Adamas uenenis ortis fuit.37.4.17.
Adamas sculpturibus utilis. 37.4.5.
Adamantis duritia inenarrabilis.37.4.48.
Adamas nũq calcis igne uincit.37.4.49
Adamas cum magnete dissolet.37.4.16
Adamas hircino rumpitur sanguine.37.4. 9.& 10. prol.15.
Adamantis herba.24.17.2
Adarcha quid.31.6.12.578
Adarcha herba & eius uis.20.22.4.389
Addax animal.11.37.12.202
Adelphides palmarum speciei.13.4.30.235
Adepi animalibus fine sensu.11.37.200.49
Adepi ouiferinus Comagenus.10.22.22
Adepi suillus laudatus.28. 9.44.500.
Adepi religiosis & in sacrifi habiuit. 28. 9. 45.501.
Adipis usus.28.9 44
Adipem minuentia.32.5.10.574
Adipsos herba.22.9.42
Adiantum herba.22.22.
Adianto herba filix eternæ.21.17. 21.409
Adianti herba miraculum.22.21.21.409

図８　早稲田大学図書館所蔵1525年バーゼル版プリニウス『博物誌』
^{2}a2^{r}：索引第１部の冒頭

CNCE 12129）を基にして『簡略ギリシア語文法 Encheiridion grammatikes eisagoges』（EDIT 16 CNCE 67886）をページ付け本として1514年に刊行した。ジュンタの次にページ付け本を刊行したのがバーゼルのヨハン・フローベンである。彼は16世紀前半においてページ付け本の発展に最も貢献した人物の一人である[25]。上述のように、フローベンは1515年にエラスムス『格言集』の２つの版とエラスムス編集の『セネカ全集』をページ付け本として刊行した。ページ付けについては、ヴェネツィアのアルドの工房でページ付け本を見ていたエラスムスがフローベンの工房にもたらしたものと言われている[26]。フローベン印刷所では1515年からフローベン自身が亡くなる1527年までに刊行した328版のうち54.27% にあたる178版がページ付け本であった。それらのほとんどはギリシア・ローマ古典、初期教父の著作、エラスムスを含む同時代の人文主義者の著作である。中でもエラスムスの著作は178版のうち91版（51.1%）を占めている。しかもこの数字には『博物誌』のような校訂本や翻訳書等は含まれていない。フローベン印刷所が意図的にページ付けを人文主義書、特にエラスムスの著書、編書、訳書に行っていたことは明らかであり、そこにはエラスムスの意図があったとみるべきであろう[27]。

それでは、本書『博物誌』に見られるような索引の編集方法はフローベンが出版した他のページ付け本にもみられるのであろうか。フローベンが刊行したページ付け本の索引ではアルファベット順の語彙にページ番号のみを示す例が多い。現時点で確認できる資料として1515年刊行のエラスムス『格言集』（VD 16 E 1933）、1518年刊行のエラスムス『格言集』（VD 16 E 1935）、同年刊のポリツィアーノ（Poliziano, Angelo, 1454-94）『詩集 Sylva』（VD 16 P 4002）とエラスムス編『ローマ皇帝伝』（VD 16 E 3645）、1519年刊のタキトゥス『歴史 Historia』（VD 16 T 12）等がある。1519年刊の『ギリシア語新約聖書 Novum Testamentum』第２版（VD 16 B 4197）の語彙索引では、ページ番号の後に p. (in principio)、m. (in medio)、f. (in fine) という略語を付してページの上部、中部、下部を明示している。

1521年刊のキュプリアヌス（Cyprianus, Thascius Caecilius, 200頃-258）『著作集 Opera』（VD 16 C 6509）の索引の説明（Z1^{r}）では“alteram folioru<m> faciem indica<n>do.”（葉の一方の面を示している）という言葉があり、『博物誌』と同様な説明をしている。また、1522年刊の『ギリシア語新約聖書』（VD 16 B 4198）では章番号とページ番号をセットで示している。このようにフローベン印刷所では索引編集にいくつかの工夫を加えていたが、語彙の箇所をページ番号で示す索引が多く、行番号を加えてより精密に示したものはなかった。

ところが、バーゼルからも遠くないライン川流域の都市であるハーゲナウ（アゲノー）でアントン・コーベルガーの甥のヨハン・コーベルガー（Koberger, Johann, 1543没）とルーカス・アラントゼー（Alantsee, Lukas）が1518年に刊行したバルバロ版『博物誌』（VD 16 P 3528）には葉番号（foliation）と行番号が付与されていた。しかしながら、索引では語彙の箇所を巻、章、行番号の順で示しながら、葉番号を利用しなかった。この例をヒントに、編集者レナヌスは1525年版『博物誌』の索引をさらに使いやすくするために、巻、章、行番号、およびページ番号を用いたのではないだろうか。『博物誌』は各巻と章が比較的短いため、それらを優先して行番号を加えれば語彙の位置を十分に指示できると考えて、ページ番号を副次的に扱ったとみなされる。そのためページ番号と行番号で示す方法は採用されなかったのではなかろうか。

ページ番号と行番号で語彙の箇所を示す単純な方法は最初のページ付け本である1499年アルド版ペロッティ『豊穣の角』で採用されている。それ故、レナヌスの試みは決して合理的ではないが、『博物誌』に即した工夫の現れとみなすべきであろう。また、フローベン印刷所では「ページ」という新しい概念に対して、すでに1516年刊行の『ギリシア語新約聖書』初版の正誤表（2F7$^{r\text{-}v}$）の中で“Pagina, Pag. Pa.”という単語を用いて「ページ」を示しているが、その後も“facies altera foliorum”という言葉を用いており、“pagina”が近代的な「ページ」を意味する言葉としてまだ十

分に定着していなかったことをうかがわせる。

９．おわりに

上記のように、館蔵の1525年バーゼル版プリニウス『博物誌』は、バーゼルに居住していたエラスムスが校訂し、ベアトゥス・レナヌスが編集にあたり、ヨハン・フローベンが印刷出版したバーゼルでの初版本である。本書の巻頭の書名は“Historia mundi”となり、索引の標題は“Naturalis historia”となり、二種類の標題をもっている。標題紙には書名、印刷地、印刷者、印刷年が明記されている。また、『博物誌』としては初めてページ付けが行われた版である。そして、索引では語彙の箇所が巻、章、行およびページ番号で示されていた。すなわち、本書は標題紙、序文、本文、ページ付け、独自の工夫をした索引を備える近代的な書物形式の要素を整えていた版であるということができよう。

ページ付けは15世紀末にアルド・マヌーツィオによって考案された。「ページ」という概念がまだなかったため、アルドは「ページ」を意味する言葉として“semipagina”（１葉の半分）を用いた[28]。その後、フローベン印刷所はアルドとエラスムスの影響で人文主義書の印刷を行って、すぐにページ付けを採用した。そこでは“Pagina”という言葉を「ページ」の意味に使っていたが、一方で“facies altera foliorum”という表現をなおも使用して「ページ」の意味を説明する必要があった。そのことから、1525年においても「ページ」の概念はまだ十分に定着していなかったとみなすことができる。

一方、1525年版『博物誌』の編集者であるレナヌスは、この版に基づいて第１巻序文、第７巻、８巻、10巻、14巻に詳細な注釈を施す注釈書（VD 16 R 2062）を1526年に直ちに刊行して、編集に携わった学者として『博物誌』の研究成果を示した。

1527年にヨハン・フローベンが亡くなると、彼の友人でフローベンの未

亡人ゲルトルデ（Lachner, Gertrude）を娶ったヨハン・ヘアヴァーゲン（父）（Herwagen, Johann, 1497-1557/59）とフローベンの長子ヒエロニュムス（Froben, Hieronymus, 1501-63）、彼の姉妹を娶った義兄弟のエピスコピウス（Episcopius, Nikolaus, 1501-1563）が印刷所を後継した。1531年にヒエロニュムスとエピスコピウス（Episcopius, Nikolaus, 1501-1563）はヘアヴァーゲンと別れて共同で印刷所の経営に乗り出した。このように継承されたフローベン印刷所はプリニウス『博物誌』（二折判）を1530年（VD 16 P3534）、31年（VD 16 P 3535）、35年（VD 16 P 3537）、39年（VD 16 P 3540）、45年（VD 16 P 3542）、49年（VD 16 P 3543）、55年（VD 16 P 3545）に刊行している。これらのうち31年版を除いてその他はいずれもエラスムス版を基にゲレンが再校訂したもので、ほとんどが序文と第１巻が18葉、第２巻から37巻までの本文が671ページで構成されている。しかし、索引は1525年版とは大きく変わっている。語彙の位置がページ番号と行番号で示されている。つまり、レナヌスが行った索引の工夫は後継者には踏襲されず、より単純で合理的な方法に作り替えられたのである。

以上のように、フローベン印刷所がページ付けを率先して行ったことにより、バーゼルの他の印刷業者もページ付け本の刊行を積極的に進めた。1518年からはクラタンデル（Cratander, Andreas）が参入し、19年にはペトリ（Petri, Adam）、20年にゲンゲンバッハ（Gengenbach, Pamphilus）、22年にクリオ（Curio, Valentin）、23年にベベル（Bebel, Johann）、24年にヴォルフ（Wolff, Thomas）と続き、1529年にはバーゼルで１年間に刊行される印刷本の50％以上をページ付け本が占めるまでになった。その後1555年にはページ付け本が91.26％に達している。バーゼルのページ付けはその後ケルンやリヨンに波及して、書物の近代的な形式を整えることに大いに貢献したのである。

謝辞：本研究は JSPS 科研費 JP17K00454の助成を受けたものです。

略語一覧

EDIT 16：Censimento nazionale delle edizioni italiane del XVI secolo, URL: http://edit16. iccu.sbn.it/ web_iccu/ imain.htm (accessed 14 Oct. 2017)

ISTC：Incunabula Short Title Catalogue, URL: http://data.cerl.org/istc/_search (accessed 14 Oct. 2017)

USTC：Universal Short Title Catalogue, URL: http://ustc.ac.uk/index. php/search (accessed 14 Oct. 2017)

VD 16：Verzeichnis der im deutschen Sprachbereich erschienenen Drucke des 16. Jahrhunderts, URL: https://opacplus.bibbvb.de/TouchPoint_touchpoint/start.do?SearchProfile=Altbestand&SearchType=2 (accessed 14 Oct. 2017)

注

(1) Healy, John F., *Pliny the Elder on science and technology*, Oxford: University Press, 1999, p. 7-9.

(2) 書名の日本語訳は國原吉之助による（プリニウス著、國原吉之助訳『プリニウス書簡集：ローマ帝国一貴紳の生活と信条』講談社、1999年（講談社学術文庫1367）、p. 114-119、著作一覧は p. 114-116）。書名のラテン語原題は C. Plinius Caecilius Secundus, *Plini Caecili Secundi Epistularum libri decem*, recognovit brevique adnotatione critica instruvit R. A. Mynors, Oxonii: e Typographeo Clarendoniano, 1990, p. 72-73参照。

(3) 『プリニウス書簡集』p. 118。

(4) 前掲書、p. 230-236参照。大プリニウスの死亡の原因ははっきりとしていない（*Brill's New Pauly: encyclopaedia of the ancient world*, vol. 11, Leiden: Brill, 2007, col. 384）。

(5) L. D. レイノルズ・N. G. ウィルソン著、西村賀子・義武純夫訳『古典の継承者たち：ギリシア・ラテン語テクストの伝承に見る文化史』国文社、1996年、p. 148-150。

(6) これらの数値は ISTC の検索結果に基づく（2017年10月８日参照）。

(7) これらの統計は USTC の検索結果に基づく（2017年10月８日参照）。

(8) Vanautgaerden, Alexandre, *Érasme typographe: humanisme et imprimerie au début du XVIe siècle*, Genève: Droz, 2012, p. 319-324.

(9) Augustijn, Cornelis, *Erasmus: his life, works, and influence*, translated by J. C. Grayson, University of Totonto Press, 1991, p. 74.

(10) Phillips, Margaret Mann, *The 'Adages' of Erasmus: a study with translations*, Cambridge: at the University Press, 1964, p. 75, 96.

⑾ Augustijn, op. cit., p. 31.

⑿ アンドルー・ペティグリー著、桑木野幸司訳『印刷という革命：ルネサンスの本と日常生活』白水社、2015年、p. 145-146。

⒀ Augustuij, op. cit., p. 108.

⒁ Augustijn, op. cit., p. 109.

⒂ バーゼル滞在中にもエラスムスは1515年夏にネーデルラントとイングランドに４か月ほどかけて旅している。Cf.: Augustijn, op. cit. p. 107.

⒃ Augustijn, op. cit., p. 119.

⒄ 沓掛良彦『エラスムス：人文主義の王者』（岩波現代全書032）岩波書店、2014年、p. 58-59。

⒅ Vanautgaerden がリストアップした édition princeps（初版）から算定した（cf.: Vanautgaerden, Alexandre, op. cit., p. 511-520）。

⒆ Cf.: Haege, Ferdinad Vander, *Bibliotheca Erasmiana: répertoire des oeuvres d'Érasme*, Nieuwkoop: B. De Graaf, 1972 (reprint ed. of the 1893 ed., Gand), 2e série, p. 68.

⒇ アンドルー・ペティグリー、前掲書、p. 145。

㉑ *Contemporaries of Erasmus: a biographical register of the Renaissance and Reformation*, vol. 3, Toronto: University of Toronto Press, 1987, p. 324-325.

㉒ C. Plinius Caecilius Secundus, *Plini Caecili Secundi Epistularum libri decem*, recognovit brevique adnotatione critica instruvit., p. 72-75.

㉓ Ibid., p. 173-177.

㉔ Vecce, Carlo, Aldo e l'invenzione dell'indice, David S. Zeidberg (ed.), *Aldus Manutius and Renaissance culture: essays in Memory of Franklin D. Murphy; Acts of an International Conference, Venice and Florence, 14-17June 1994*, Florence: Leo S. Olschki, 1998, p. 117-119; 拙稿「最初にページ付けをした本、ペロッティ『ラテン語の豊穣の角』をめぐって」『書物学』10、2017、p. 11。

㉕ 拙稿「西洋におけるページ付けの起源と発展について」『2017年度日本図書館情報学会春季研究集会発表論文集』日本図書館情報学会、2017年、p. 85。なお、この発表要旨では３番目にページ付けを行った業者をミラノの Giovanni Scinzenzeler としたが（p. 84）、これはデータベース EDIT 16における対照事項の記述（CNCE 54733）の間違いであることがその後の調査で判明した。EDIT 16 CNCE 54733では "229, [7] p." と記述しているが、実際には229, [7] carte [=leaves] である。したがって、フローベンが３番目となる。

㉖ Saenger, Paul, The impact of the early printed page on the history of reading, *Bulletin du bibliophile*, 3, 1996, p. 276-277.

(27) Saeger はエラスムスを「ページ付けの父」とまで呼んでいる。Saenger, Paul, op. cit., p. 278.

(28) 拙稿「最初にページ付けをした本、ペロッティ『ラテン語の豊穣の角』をめぐって」、p. 11。

（ゆきしま　こういち　教育・総合科学学術院教授）